

一月二十一日

一、(東京) 朝日紙の報ずる處によれば内閣参議の荒木(原文通り) 末次、松岡三氏は米内首相の留任懇請を拒否したと、

二、(東京) 同盟通信の報道に依れば興亞院會議開催され米内首相、畑陸相、有田外相、櫻内藏相、石渡書記官長出席し最近支那から歸國した柳川長官から汪の支那中央政權樹立に關する報告を聴取した、

三、(重慶) 支那軍當局は外人記者と會見最近の戦況を次の様に發表した即ち南支に於ては後退を始めた廣東方面の日本軍は引續き後退を續け支那軍は之を追撃中であり廣東の北東及北西に迫つて居る、かくて日本軍の廣東北方進出は失敗に歸した、日本軍は從化及花縣から撤退した、南寧方面に於ては日本軍は臺灣から増援部隊を得て攻撃し來たがシンキヤン占領に失敗した、支那軍はジュタン方面に進出して居る、中支はさしたる變化なきも湖北省中部に於て十一—十二日、日本軍はジュシヤンに進撃し來たが支那軍は増援を得て之に反撃を加へ撃退した。

内閣情報部一・二四 情報第一號

◎ 大公報暴露記事と外紙反響
同盟來電—不發表

一、ニユーヨーク廿二日萩原特派員發

大公報の日支和平協定暴露記事はヘラルド・トリビュン上海電とAP香港電とに依り詳細報道せられたが、何れも汪精衛を以つて日本の傀儡に過ぎずと解する者に一層の確信を與へてゐる、從つて汪精衛政權の獨立的立場の主張は餘程明確且具體的な事實に依り裏書されるのでない限り米國官民を納得せしめることは困難と見られる。

二、パリ廿二日入江同盟特派員發

廿二日の大公報紙上に發表された日本政府と汪精衛間の和平協定内容はパリに於いてセンセーションを擡き起し廿二日の朝刊各紙は何れも之を第一面に掲げ大々的に取扱つてゐる、社説で批評してゐるものは未だないが政界方面では右を目して日本が汪政權を完全なる自己藥籠中のものとなすものであるとなし大要左の如き見解を表明してゐる

『大公報に依つて暴露された和平協定は日本が支那と第三國間に現存する諸條約を無視し汪政權を完全な自己藥籠中のものとなすものである、協定の内容が若し暴露された通りのものであるとすれば現在支那に於いて正當なる權益を有する諸國は之に依つて致命的打撃を蒙ることとならう』

西貢佛語放送 (二十日)

(東京都市通信局轉取)

一、英國軍需相との協議を遂げて歸來した佛國ディエトリ軍需相は十九日巴里に歸還したが、歸巴と同時に左の談話を發表した、

英佛兩國が長期戦遂行の共同目的のために軍事上、經濟上協力をなしてゐる、事は既に秘密を要しないが今回の渡英は軍需關係事項に就いて兩國の緊密なる協力の下に戦争の繼續する限り經濟的同盟を締結して恰も單一國家の如く軍需品の工業的生産を統一して戦線への供給を豊富ならしめる目的の爲であつて兩國が完全な意見の一致によつて戦争遂行の使命達成のために努力をなし得るに至つた事は寔に欣快に堪えない。

一、佛國政府は佛國議會から共產黨議員除名の件に關する法律案を提出し二九九票の大差を以て之を可決したが、この票決に出席した共產黨議員はカシヤン氏一名のみであり政府は引續き大統領司會の閣議を開いて同法律を公布する筈である。

一、ルーマニア外相とユーゴスラヴィア外相は秘密裡にルーマニアの某所に於て會談を遂げたがバルカン協定に關聯してブルガリア問題に就き意見の交換をなしたものと信ぜられる。